

竜馬外伝

京の賢侯政体の章



中祭邦乙

i

42

前年の文久二年（1862年）、土佐を脱藩した坂本竜馬は藩の縛りから抜け出して、多くの若者と同様に尊王攘夷へと傾倒した。志士と歩調を合わせて世の変革を求めようになっていた一方で、彼の心根には日本を凌駕する世界感が息衝いていた。・・・ただそれに竜馬自身も気付いてはおらず、深く静かに眠っていた。

この時、幕府政事総裁職にあった松平春嶽は志士の声に耳を傾けて、世の変革を望む若者の破壊的な力の結集を和らげる言論洞開策に動いた。世の平定を守るため、そういった思い切った方策を用いなければならない程に徳川幕府は追い込まれていたのである。

竜馬は千葉重太郎の立場を利用して松平春嶽に拝謁の機会を得ると交易に興味がある事を伝え、春嶽は攘夷に加えて開国への意識も高い坂本竜馬に興味を持った。そこで幕府軍艦奉行・勝海舟への紹介状を与え、竜馬は重太郎と共に海舟の許に出向いたのである。

志士に命を狙われている開国論者・勝海舟に興味があった竜馬に対し、迎え入れた海舟は世の状況をこう説明した。

「世界は広い。日本国を守り抜くには異国の文明をも利用して海軍力を強化すべきだ。徳川家とて朝廷に大政を奉還する覚悟をもって挑まねばならない。そういう変革の時代なのだ」と。

・・・その場しのぎの開国論者ではない。勝海舟という人物には日本国のために命を捧げる覚悟がある。そして海軍と交易の必要性を説く大人物なのだ。心服した竜馬はその場で弟子になった。勝海舟を『日本第一の人物』と称賛し、その弟子となった事を「エヘン、エヘン」と家族への手紙に綴って報告したのだった。

文久三年（1863年）二月、勝海舟は弟子となった坂本竜馬ら土佐脱藩者の罪の赦免を取り付けるべく土佐藩の実権を握る山内容堂に申し入れ、同時に彼等が勝海舟の海軍塾に入門する事を認めさせた。海舟の海軍構想にとって竜馬らが必要と考え、彼の人を惹き付ける人間力が幕府や藩といった垣根を越えた日本海軍成立のカギになると予感していたからである。ともあれ、これにより坂本竜馬以下、土佐藩出身の千屋寅之助・新宮馬之助・望月亀弥太・近藤長次郎・沢村惣之丞・高松太郎・安岡金馬らが勝海舟の海軍塾門人となったのは確かな前進であった。

そしてこれ以降、竜馬は海軍構想実現のため勝海舟の使者となり、海軍操練所設立に向けて奔走し始める。京の情勢を探りつつ、幕府や各藩の要人に接触して海軍設立の必要性を説いて回ったのだ。

「軍艦に乗って頂ければ感じるはずだ！」

勝海舟は将軍徳川家茂を軍艦・順動丸に乗せる事に成功し、将軍は神戸海軍操練所の設立と資金の捻出、そして併設する形での海軍塾開設を認めたのである。

「春嶽公に資金協力をお願いしてくれ！」

即座に海舟は竜馬を福井藩へと向かわせた。幕府政事総裁職を辞任した松平春嶽に海軍構想への支出を求めた竜馬は資金協力を得る事に成功し、そこで横井小楠に出会い、その世界普遍の道

理に基づいた思想に竜馬は強い感銘を受けたのだった。

この頃、桜田門外の変や将軍家茂の上洛により幕府が力を失ったのは明らかになっており、そればかりか事実上、日本の政事を中心は京に移っていた。

しかしそんな京で大きな顔をしていたのは、攘夷浪人を操り、天誅を繰り返す長州藩だった。天誅という刃は幕府ばかりか朝廷までも思うがままに動かしていたのである。

そして五月十日、遂に長州は攘夷実行と称し、馬関海峡を通過する異国船に対して次々と砲撃を開始した。・・・異国船は逃げ惑い、長州は連戦連勝との噂を聞いた大和民族は溜飲を下げたのだった。だが長州藩を賛美する声が大きくなる中、異国軍艦の逆襲に遭い、海峡を封鎖していた長州軍は壊滅的な痛手を負ったのだ。またあろう事か、幕府は異国側に協力し、異国船の修理を買って出っていたのである。

竜馬は強い憤りを覚えた。

「長州藩を敵視するあまり、援護するどころか異国と手を組むとは。そんな役人根性の幕府はもうダメだ！ 日本を洗濯するしかない！」

竜馬は怒りのまま、家族への手紙にそう綴っていた。

「徳川幕府を倒せ！」

長州藩は尊王攘夷派の公家と共に天皇による倒幕策を進めた。・・・天皇の号令による倒幕志士の挙兵計画である。

まず尊王攘夷過激派の公家・中山忠光率いる天誅組が、大和行幸の先鞭として大和国で挙兵したが失敗。幕府軍に包囲された吉村虎太郎・那須信吾ら土佐脱藩志士達が討ち死にした。

そして迎えた八月十八日、中川宮を中心に薩摩藩と会津藩が連携して京から長州藩を追放し、朝廷を操っていた三条実美ら七卿も長州へと追い落とされた。・・・八月十八日の政変である。これにより朝廷を尊王攘夷派から奪回し、京の実権は公武合体派へと移った。

・・・天皇に近い中川宮が権力を握ったのである。

文久三年（1863年）八月十八日に政変を起こした中川宮は、京から三条実美ら尊王攘夷派公卿と長州藩士を追放したばかりか、同時に京都学習院への出入りを固く禁じていた。

それが極めて重要な決定だったのである。それほどに京の学習院は特殊な場所だったからである。

尊王諸藩の下級武士は学習院で尊王派公家と交わり、そこで国事を論じる事で反逆の力を増幅してきたのだ。・・・ここは幕府を抜きにした特別な空間であり、志士と公家が攘夷や倒幕の密謀を巡らしてきた特別な場所なのである。学習院は公家の子弟が学習するための場所ではなく、真の目的は公家と諸藩による武家政治への調整機関としての組織なのであった。

征夷大將軍の役目を担えなくなったならば、徳川家は幕府としての資格を失う。よって他の武家がそれに取って代わり、そして新たな政治体制を構築する必要が生じる。そのための調整役がこの時代の学習院の役目だったのだ。

長州藩の吉田松陰はそれをよく理解していた。

よって学習院を重要視し、長州藩から高杉晋作、桂小五郎ら多数の松陰門下生を『学習院御用掛』に任じて送り込んでいたのだ。他藩でも福岡藩の平野国臣、筑前の神官・真木和泉ら揺るぎない志士を『学習院出仕』に任じて送り込んでいたのである。

・・・この幕末、倒幕の一点において、学習院は反幕府のための秘密機関だった。

その京都学習院を設立させたのは誰なのか。

・・・天皇である。

時の天皇は孝明天皇であるが、その二つ前の天皇、孝明天皇の祖父に当たる光格天皇が京都学習院設立を働き掛け、息子の仁孝天皇が即位した後に学習院は活動を開始した。つまり実際に設立を進めたのは光格天皇なのである。

では、なぜ光格天皇は京都学習院を設立させたのか。

・・・朝儀の再興、朝権の回復に熱心な光格天皇は、京を軽んじる武家政権たる徳川幕府を問題視していたのだ。・・・いや、武家が日本を操るようになった実状に危機感を抱いていたのだ。

「武家は人を殺して世を治める者。そんな穢れた者に真の平定は望めない。必ずや日本国、大和民族を危機へと導くであろう」

そして世界には異国があり、中でも西洋人は他者を重んじる精神に薄く、侵略に明け暮れている事を知っていた。その魔の手がいつか日本を襲ってくるであろう事を、光格天皇は予見していたのである。

そのための準備として京に学習院を作って尊王藩に異国と異国人の危険性を説き、同時に武家政権たる徳川幕府の終焉の準備として尊王藩を育てていたのだ。・・・それが尊王攘夷である。

光格天皇が反幕府勢力の中心に据えたのは、尊王の総本山と呼ばれる水戸藩であった。水戸藩には幕府の見張り役をさせ、同時に吉田松陰ら国内の尊王家に尊王攘夷を伝搬させた。そうやっ

て国内に倒幕運動の機運を高まらせていったのである。

また公家の代表として息子の恵仁親王を仁孝天皇とすると共に、別の息子を密かに中山家へと入れていたのだった。

それは何故なのか。

中山家に入った光格天皇の息子は重要な密命を秘めていた。

・・・密命とは何か。

それは日本国の歴史は武家の歴史ではなく、天皇の歴史なのだという事。つまり日本は天皇を中心とした神の国だという事である。

天皇は常に異国を意識しており、よって天下統一した武家を征夷大將軍に任じて異国を退けるよう政権を委ねてきたのがこれまでの歴史だが、徳川家は明らかにその能力を失っており、鎖国を理由にして西洋人との戦いを避けている。

・・・何のための征夷大將軍か。

武家はいつも国よりも己の氏族を中心に物事を考える者達なのだ。もっと日本国すべての民の事を考えて政事をしなければならないのに、それが出来ない。それが武家政権の限界なのだ。

「・・・だから時が来たならば、日本の主権を天皇家に戻さねばならない。その倒幕運動を公家の中からも起こすのだ」

それが光格天皇の息子に託した密命であった。

倒幕運動を公家と諸藩の両面から起こすよう仕掛けていたのである。

そもそも日本国は大和民族に多民族が流れ込んで出来上がった国であり、古代から天孫たる天皇を中心に和をもって結束してきた国である。

しかし武家は殺戮という力で全てを従わせようとする。

・・・それが武士の業であり、穢れなのだ。

南北朝に天皇が両立したのも、織田信長が異国と手を組もうとしたのも、武家の気質の問題である。国が大きく混乱するのはいつも武家が自己中心的に武力を用いるからなのだ。

だから楠木正成も明智光秀も、主権を天皇から奪おうとする武家と戦ったのである。彼等は天皇の臣なのだ。

そして光格天皇も墮落した徳川幕府に見切りをつけ、

「政権を武家から天皇家に取り戻さねばならない！」

と決意していた。

徳川幕府には陰りが見えていたが、公家を諸法度で縛り、その独裁制を露わにしている。

「・・・このまま行けば日本国の秩序が乱れ、いずれ異国との接触も避けられない。再び異国の侵略が始まれば、今の徳川政権ではこの国はもたない」

嘗てキリスト教と手を結んだ織田信長によって日本国体が危機に陥った事がある。異国人は巧妙なのだ。

世界を意識する天皇にとって日本の国土も民もその根本である。

「国体を守る事が最重要だ！」

それが天皇家の存在でもあるのだ。そこで光格天皇は近侍している信頼できる公家・中山愛親（なるちか）に息子を預けたのである。中山愛親は先頭に立って幕府と激しく対立する気概

を持った公家だった。いや、実のところを言えば、光格天皇とはそもそも血縁関係にあったのだ。そんな中山家へと息子を密かに入れたのである。

・・・徳川幕府から新政体へと移行せよ！　ただし、この国が混乱し、崩壊する事のないように慎重に進めなければならない。

光格天皇の息子は岩倉家と共に倒幕の密命を生涯背負ったのである。それを心に秘めて中山家の養子となり、中山忠尹（ただまさ）を名乗った。・・・光格天皇の意志を受け継いで、武家政権打倒と天皇主権の新政体成立に使命を燃やしたのである。

文久年間、彼はもう年老いていたが、密かに天誅組の変にも参加した。いや、影の総大将となって十九歳の甥っ子・中山忠光を動かしていたのだ。

そして中山忠光は天誅組の先頭に立って挙兵した。全ては中山忠尹が影の存在となって金剛山から指示を下していたものだった。・・・つまり天誅組の変は中山忠尹が起こしたものであったのである。

天皇の親征による倒幕決起のために中山忠尹が企てたのが天誅組の大和挙兵だったのだ。

しかし天誅組の変は幕府によって潰され、倒幕計画は失敗した。

同時に京で政変が起こされ、忠尹と通じていた長州藩も京を追われたのである。

忠尹は甥っ子の中山忠光を長州へと逃がし、自身は摂津平野に潜んで挽回の時を待った。だがその機会を得ず、遂には自刃して果てたのだった。

・・・こうして光格天皇の意志、倒幕の意志は潰えたかに見えた。だが、その光格天皇から始まった倒幕の精神は息子の仁孝天皇、そして孫の孝明天皇へと受け継がれている。尊王家の水戸でも徳川齊昭が花を咲かせ、藤田東湖を通じて尊王の申し子・長州の吉田松陰に引火しており、弟子達に引き継がれている。後に竜馬の仲介を得て薩長連合を成し、爆発的な倒幕運動から明治という新政体となって成し遂げられるのである。

だが今はまだ薩摩と長州は水と油である。

薩摩を憎む長州藩は水戸藩と手を組み、倒幕運動を再開しようとしていた。

— 浦賀 —

十一月一日、順動丸が入港してきた。

下船してきた勝海舟は、小舟に乗り換えて江戸の町へと向かって行った。

船に残された海軍塾生達は佐藤与之助を中心に順動丸の整備を進めていく。佐藤与之助は長崎海軍伝習所時代から勝海舟と行動を共にしてきた男で、神戸海軍操練所建設計画の中心的な役割を受け持っている人物なのだ。

そんなところに幕府の要人一行が現れ、乗り込んできた。・・・将軍後見職の一橋慶喜である。

この船で上京するつもりなのだ。

「まず兵庫へと向かえ！」

慶喜はそう命じた。

塾生達は焦った。・・・将軍後見職という日本の重要人物を乗せて出航しなければならないのである。

ただ与之助はこうなるであろう事を予見していた。海舟から慶喜が上京する事になるだろうと聞かされていたのである。

そして慶喜は陸路よりも安全だと考えていた。海路なら敵の待ち伏せもない。・・・宿場で放火予告があり、側近の暗殺事件も起こっている。身の危険を覚え、陸路は何としても避けたかったのである。

・・・彼には重要な役目があるのだ。

京に鎖港交渉の報告をしなければならない、と同時に京で賢侯による国是協議を行う事になっている。

・・・幕府抜きで国の進む方向を決められては適わない。

だから是が非でも京に向かわねばならないのだ。

講武所から二百名、一橋家から千名、かき集めた兵達を陸路で京へと向かわせており、慶喜自身は兵庫で時間稼ぎしようというのである。その兵と共に入京すべく時間を稼ぐつもりなのだ。

松平春嶽が恐れていた通り、慶喜は大軍を率いて入京するつもりなのであった。・・・嘗て老中・小笠原に命じて京へと幕府軍を進めたが失敗している、武力行使派の慶喜はその力をもって京を制圧する事を常に視野に入れている人物なのだ。

戦火が上がる事を望んではない春嶽とはそここのところが違っていた。

「出航せよ！」

海舟の片腕・佐藤与之助の指示で一橋慶喜を乗せた順動丸は浦賀を離れ、大海原へと向かった。

— 江戸城 —

順動丸を降りた勝海舟が登城して来た。

京の情勢を報告すべく、老中達に呼び出されたのだ。

そして集まっていた老中達を前に、こう進言したのである。

「松平春嶽公の主張により、賢侯達が京に集められようとしています。今こそ公武合体による政体を立ち上げないとの主張によるものです。・・・過去の実績や習慣に逃げず、時勢に適した強固な政体が必要なのです。徳川家の私よりも日本の公のため、将軍にも再度京へ上って頂きたいと私は考えます。・・・京に集う諸侯達に主導権を奪われぬためにです」

海舟は必死の思いで将軍上洛を訴えた。

・・・幕老は迷った、

「徳川家抜きの新政体が京に生まれて、朝廷と共に実権を握っても宜しいのですか！」

海舟の言葉に・・・将軍家茂の心が揺らぐ。

結論は出なかった。

その数日後、朝廷より勅が届いた。

『将軍の再上洛を強く望む！ 異国との横浜鎖港交渉中であり上京が困難なのは理解できるが、天皇は公武一和を願っている。そして天下の方針を決めたいという強い思いがある。将軍は早々に上洛すべし』

全ては将軍の再上洛に向けて動き出していたのだ。

そして将軍は決意した。

「徳川将軍として上洛いたそう！」

— 勝邸 —

十一月三日、勝海舟は久しぶりに屋敷に戻った。

子供達は皆、それぞれに大きくなっており、十歳になった末っ子の四郎は見違える程に立派になって見えた。

部屋に入って着替え、ゴロリと横になるとホッとした。・・・気持ちが安らいだ。やっぱり我が家は落ち着く。

「手紙が届いております」

安堵の表情で迎えてくれた妻がそう言っていたのを思い出した。

文机の上にそれはあった。

「・・・横井小楠殿か」

福井藩を去り、故郷の熊本藩の沼山津村で閑居していると聞いている。

「あれだけの人物を片田舎に押し込めやがって」

海舟は一人嘆いて、手紙を開いた。

その中で小楠は、まず坂本竜馬と近藤長次郎に礼を述べていた。小楠の門人が神戸の海軍塾を訪問した際のお礼である。

ただそれだけの内容であった。

「ふむ」

海舟は理解していた。

(・・・無論、手紙は全て藩の役人に読まれている。場合によっては幕府の隠密の手に渡るかもしれない。だからこれ以上の事は書けねえんだ。下手に本心を書けば自分のみならず、この俺にも迷惑が掛かるだろうと思ってな。・・・だからこんな内容しか伝えられなかったんだ。無事に故郷で閑居している事しかよ)

しかし彼を尊敬しているだけに、海舟は残念で残念で仕方ない。

「世俗から離して、田舎に押し込めて、熊本藩がそんな了見で日本はどうなるってんだ！」

海舟は唇を噛んだ。

一方、その頃、坂本竜馬は京で別行動を取っていた。

— 京・東本願寺 —

十一月七日、二条堀川から東本願寺へと移った福井藩邸を密かに坂本竜馬が訪ねた。

松平春嶽に拝謁するためである。

「わしは海軍塾の坂本竜馬ぜよ」

と名乗り、勝海舟の紹介状を見せると、容易に春嶽公への目通りは適った。

もう竜馬の名も顔も、福井藩ではかなり知れ渡っているようだ。横井小楠を失った福井藩にとって、勝海舟への期待がかなり大きかったからである。

・・・新時代への暗中模索の中で世界を見てきた勝海舟は、松平春嶽と歩調を合わせて日本の

改革を進めるべく日本海軍と交易の必要性を説いている。異国との折衝にも優れ、変革を実践している有言実行の人なのである。

その弟子であり、塾頭の坂本竜馬の名も側近重役の中根雪江や三岡八郎らによって門番らに知らされていたのだ。

春嶽公に拝謁した竜馬は挨拶もそこそこに、こう口走った。

「わしも勝先生も、もう幕府というものを信用しちよりません。信頼できるのは福井藩のみです」

と言い切ったのだ。

日本国土である長州藩を攻撃した異国船の味方をする徳川幕府を、竜馬は許せなかったのだ。完全に見限っていたのである。それは幕府軍艦奉行の地位にありながらも幕府を利用し、その終焉に向かって突き進む勝海舟と一致した考えであった。

更には、

「海軍塾は金銭面で苦しい状況です。けんど日本海軍を成立させるにはもっと多くの蒸気船が必要なが必要です！」

と訴えて、協力を求めた。

この二つの案件の解決策を求めて、竜馬は福井藩にやって来たのだ。

更に竜馬にはある私案があった。

今、世界情勢は・・・産業革命による大航海時代の延長線上、植民地争奪時代にあり、日本を含むアジア諸国が狙われているのである。

勝海舟ら有識者はそれを理解し、異国の侵略戦略をこう読んでいた。

「日本の統治力の低下と治安の乱れに乗じて国土を分断し、植民地化を容易にしていく」と。だから、

「このまま幕藩体制が続き、国内で内戦が頻発すればそれを利用してくるだろう」とも見ていた。

それを危機だと受け止めた志士達は、直接的に異国人を排除すべきだと主張して攘夷を実行していたのだ。その中心が水戸であり、長州であった。

水戸藩は異国の文明を理解しようとしてきた歴史があったが、長州藩は異国との力の差を理解しようとし、玉砕すら美しいという侍の精神に染まっていた。故に長州は無鉄砲に馬関海峡を封鎖し、異国船を砲撃したのである。

それに対して諸外国は、幕府と大藩を分断する方向で動いていた。・・・日本の分断である。坂本竜馬はそれに気付いていた。

そして手薄になっている北方、蝦夷地の守りのために京から浪人を送り込もうと企てていた。

・・・南下するロシアへの防波堤とすると共に、京の治安を乱して朝廷や幕府の政策決定に影響を与えてきた浪人問題も解決出来る。

北方海防と浪人問題を解決する妙案だったのである。

・・・幕府の資金力を利用して、浪人に開墾と兵力としての役目を与えればいい。土佐の一領具足の精神でよ。

そんな竜馬の構想は幕府の大久保忠寛、そして勝海舟も共有していた。

・・・そして浪人を蝦夷に送るためには船が必要になる。

竜馬はそれも含めて福井藩と最接近したのだ。

その後は竜馬と中根雪江による話し合いとなった。

海軍塾が抱える問題の解決策として、竜馬はこう提案した。

「福井藩が米国から十二万五千ドルで購入した黒龍丸があるろう。それを幕府に売り渡してくれんかよ」

大砲二門を装備し、乗員六十五名の木造蒸気船である。

「何じゃと！」

中根は目を丸くした。

福井藩が富国策として開国通商を見据えて購入したばかりの蒸気船である。それを幕府に売り渡せと言うのだ。

「日本のためよ」

竜馬は平然とそう口にする。

「・・・無茶苦茶な」

「売却金については、勝先生が幕府の勘定方と交渉して購入金額以上になるよう努力してくれる。・・・そんで幕府に売却した黒龍丸は幕府海軍として我ら海軍塾が利用する。どうよ、両得じゃろう」

と言うのだ。

もう中根は観念していた。

・・・この坂本竜馬という男は己らの利益のためでなく、日本のため、全てはそこに向かって思考しているのだ。

その純粋さには感服している。

感心し、黒龍丸売却案を否定できなくなっている自分がある。などと己の甘さを感じていたが、坂本竜馬はそれだけでは引かなかった。

「それと福井藩から借りちよって大坂町奉行に預けてある五百両があるろう。そのうち三百両を拝借できんろうか」

と言い出したのだ。

「返済の目途はないけど」

とも言っている。

・・・どうやらそれは勝海舟の知らぬ話であり、竜馬も何に使うのか明言しない。

中根はそんな竜馬の瞳をジッと見詰めた。

・・・細い目の奥には、こちらを睨むようにして動かぬ瞳があった。冷たい強さと、・・・燃えるような情熱を併せ持つ瞳だ。

(後ろめたさがないのだろう。確かに福井藩から支援した海軍塾資金としてまず千両を大坂町奉行・松平信敏に渡してある。そのうち神戸操練所建設費用として既に五百両が支出されているが、その残金五百両の事をこの坂本は言っているのだ)

そもそもは福井藩から与えた資金である。

「この五百両は返済を当てにはしていませんので、どう使っても構いません。更に必要とあらば国許へ言っ下さればご用意いたします」

と中根は答えていた。

竜馬はニコリとした。

「でも勝先生には、春嶽公からの塾生育成費という名目にしちよって下さい」

竜馬はそう言い切る。中根は不審に思えるが問い詰める気にはならない。

「何に使うのです？」

と尋ねたいが言葉にならない。

すると竜馬は自らキッパリとこう答えた。

「海軍塾の塾生達が行き詰まりよるき」

「どういう事です？」

「わしら土佐藩士は、これまでは藩から手当が出ちよったけど、もう出しちゃ貰えんきによ」

竜馬は塾頭としてこの三百両を塾生の手当に利用するつもりなのだ。あるいは幕府を利用した

海軍構想が潰えた場合の蓄えとして考えているのである。・・・竜馬の心の隅には、河田小竜から教えられたカンパニーという考えがまだ息づいているのだ。

ただ今回の三百両支出については海舟の知らぬ事であり、竜馬の一存で持ち掛けた話なのである。それが竜馬と海舟との間でしこりとなってしまおうのであるが・・・。

竜馬は土佐の現状を話した。

土佐では、下士が藩論を尊王攘夷論へと主導してきた事に対して山内容堂が牙を剥き、いよいよ鉄槌を下し始めている事を。

「土佐勤王党員を捕縛せよ！」

容堂は間崎哲馬・平井収二郎らを勤王党の主要人物を切腹させたばかりか、党員を次々に投獄し、そしていよいよ首領・武市瑞山までも獄に送り込んだのだ。

瑞山は抵抗しなかった。

「逃げ隠れするような生き方はしていない」

勤王という正義において、己の心に一点の穢れもなかったのである。

だが事実上、勤王党は壊滅状態に陥った。

またそれだけでは済まされず、神戸海軍塾の坂本竜馬ら土佐藩士にも帰国命令が下されたのだ。

そこで塾頭となった竜馬は土佐出身の仲間にこう伝えていた。

「戻れば殺されるだけじゃ！ もう一度、故郷を捨ててしまえ！ 日本のために生きればいざよ！」

藩の命令を無視するよう言い聞かせたのである。

そして再び故郷を捨てる覚悟を一人一人が固めていたのである。

中根が竜馬に尋ねた。

「土佐国許に帰った容堂公が勤王党への弾圧を始めたとは聞いているが、よもや坂本殿や海軍塾生にまで及んでいるとは・・・」

「下士を潰すつもりよ。だからわしらは土佐藩への帰国命令を蹴って再脱藩するがよ。・・・これからは仲間で結束して生きていく、わしはそう覚悟を固めちゅうがじゃ！」

強い決意が見て取れる。

「故郷を敵にまわすのか」

「そうなるのう、・・・今の土佐藩はダメよ、当てにならん！」

・・・もう止められない。

中根雪江はそう感じた。

ただ竜馬の目や口元は苦しい心情を物語っている。

中根は言葉に詰まってしまった。

すると竜馬はコロリと表情を変え、こう尋ねてきた。

「そもそも春嶽公はよ、幕府に代わる共和制政体を目指しちょう。そこに徳川家も含むのならば幕府の將軍後見職の一橋慶喜公と歩調を合わせる必要も大いにある。果たしてそのつもりはあるかよ？」

雄藩連合を目指す筆頭の松平春嶽とそれに同調すべき幕府側筆頭の一橋慶喜の関係である。一

時は幕府の両輪だった二人だが、結束する事が出来ずに春嶽は政事総裁を辞任した経緯があるのだ。

・・・この二人が本当に手を組めるのか？

今後の政局において肝心の部分である。

それに対して中根は、

「無論だ」

と頷いて見せた。

徳川幕府を取り込むつもりなのか、排除し、倒すつもりなのか。春嶽公の心中にある共和制の形を竜馬は確認したかったのである。

この時の竜馬は、日本海軍推進者でありながらも、福井藩と通じる密偵ような立場でもあるのだ。もしも互いの目指す形なり信念なりが異なればその関係も続かない。

(道理を説いて導いてきた横井小楠を失っても、方針に変わりなしじゃな)

そう認識した。

そして話しは更に突っ込んだ内容にまで及んだ。

別れ際、竜馬は活動資金として中根雪江から十五両を受け取ったのであった。

— 江戸 —

屋敷に戻って一夜が明けた。

勝海舟は朝から土佐藩への嘆願書を書いていた。それを土佐藩江戸詰の目付に渡すつもりなのである。

『幕船の乗組員が不足する状況が続いておりますが、お預かりしている土佐藩士達が奮奮して学んでくれており、助かっております。また坂本竜馬などは塾頭を任せるなど、必要な人材でもあります。どうか彼等の国許への召喚の延期をお願い申し上げます』

そう綴っていた。

・・・そもそも山内容堂が竜馬達の海軍塾修行を許し、それぞれに手当まで出していたのだから、軍艦奉行として申し入れれば彼等を救う事が出来るのではないか。

海舟がそう思ったのも当然である。

だが結局、嘆願書を受け取った土佐藩留守居役がこれを認めようとはしなかった。

・・・恐らく、この嘆願書が土佐国許の山内容堂の手に渡ったとしても同じ結果だったであろう。

何しろ悪い噂が聞こえてきている。

・・・土佐の国許で勤王党員が次々と捕縛され、その罪を認めさせるために次々と拷問にかけているらしい。

酷いものである。

「下士は虫けらか・・・。低い身分に生まれたという運命が、どんなに正しい事をしようとしても許してはくれない。土佐の宿命がその足を引っ張るとはな」

海舟は竜馬らの頭上に拡がっている暗雲を、祓う事が出来ない己の無力さを痛感させられた。

けれど、

「それでも前に向かって行くのが人の強さであり、美しさかな」

と悟ってもいた。

ともあれ・・・こうして竜馬達は再び故郷を捨て、脱藩の身になったのである。

ただ日本のために。

— 土佐 —

勤王党は壊滅状態だった。

捕らえられた軽格の党員は厳しい拷問を受け続けている。

「暗殺を繰り返して藩主から朝廷までも騙し、徳川家に楯突いた罪は重いぞ！ 命令を下したのは武市瑞山であろうが！ 吐け！」

死と背中合わせの拷問が襲い掛かる。勤王党員の肉体をうち据え、引き裂く。死を凌ぐような痛みが、繰り返し繰り返し襲い、意識を失うと水を浴びせられてまた苦痛に襲われた。

しかし党員達は耐えた。耐え続けた。苦痛の中で罪を否定し続けたのである。

尋問に当たる大監察は後藤象二郎や乾退助を含む上士の面々だ。中でも後藤象二郎は執念を見せていた。

・・・参政・吉田東洋を殺したのは土佐勤王党に違いない！

彼は吉田東洋の義理の甥なのだ。

(武市瑞山を生かしてはおいてなるものか！)

ただならぬ執念であった。

一方、勤王党を導いてきた武市瑞山は拷問を受ける事もなく、藩庁大監察による尋問を受けるだけで、肉体を責められる事はない。上士格となった瑞山は『屏風囲い』と呼ばれる形ばかりの簡単な聞き取りをされるだけで拷問する事を免れていたのだ。

「肝心なところは何も聞き出せないのか！」

象二郎は苛立っていた。

・・・ならば拷問を受け続けている勤王党員が尻尾を出すのを期待するしかないが、みな口が固い。命懸けで守るつもりなのだ。

「ならば、あいつを捕えるしかない」

その目が怪しく光った。

軽格の勤王党員は繰り返す日も繰り返す日も拷問を受けていた。

生き地獄である。

・・・潰れていく肉体、繰り返し襲う激しい痛み。

死と隣り合わせだった。

悶死する者も出た。

亡者のようなうめき声が耐える事はない。

その声が直接聞こえては来ないが、瑞山にとっては耐え難い精神的苦痛である。

・・・恨みや思念が襲ってくるのだ。

気が狂いそうな中で武市瑞山は耐え続けていたが、遂にある手を打った。

瑞山に傾倒している獄吏を取り込み、

「便宜を図って欲しい。・・・まず獄中の同志と手紙のやり取りをさせてくれ」

と求めたのである。

その獄吏は毅然とした姿を常つ瑞山を心から尊敬しており、要求を聞き入れた。そして瑞山は同志とやり取りが出来るようになったのである。瑞山は軽拳妄動を戒める文を同志に送った。

「同志の団結を維持せよ！ 他の同志や協力者への連座を防げ！」

吉田東洋暗殺、京で繰り返した天誅、ほか不利になるような事は全て否認し続けるよう暗に伝えたのである。

・・・長い戦いになる。

瑞山はそう覚悟していた。

ただ妻にだけは、決して他人には見せない弱さを伝えていたのである。

『便所の悪臭が満ち、ノミやシラミがはびこる獄中生活は、涙の乾く間もないもので、ただ悔しさにのた打ち回っています』

と嘆く手紙を出していたのだ。

若くして両親を失い、それでも由緒ある武市家を背負って生きてきた。努力に努力を重ねて自らを磨き、信頼を得て、遂には土佐下士を導く立場にまでなった。土佐勤王党を立ち上げて上士に対抗するまでの勢力を作り上げて、一時は土佐藩主を勤王に傾倒させ、上士から藩の主権を取り戻したかにも見えた。そして自らは上士と同等の地位にまで上り詰めたのである。

そんな人生だった。

だが、そんな強い男もとことん追い込まれていた。

今の瑞山は羽をもがれた鳥のようなものである。

「隆盛を極めた勤王党も潰え、獄中の我が身。だが、その嘆きがどんなに大きくとも、弱さを人に見せる事は出来ない。

・・・それが苦しい。

・・・ただひたすらに拷問を耐え続けて、その果てに同志が次々と死んでいく。決して口を割らず、多くの秘密を背負ったままで死んでいく。ただ盲目的に私を信じたままで・・・。

・・・その事実が重い。

だがこれもまた勤王の戦いなのだ。逃げてはならない」

瑞山は己を奮い立たせるが、この獄中闘争がどこまで続くのか、先が見えない。

その苦しみは想像を超えているのだ。

そして懸念される事もある。

「捕えられた党员以外に決定的な男がいる事だ。けれど奴はまだ捕らえられていない」

・・・京で天誅を命じる瑞山の手足となって刀を振るった男。

その後は瑞山に捨てられて姿を眩ませたが、そんな彼が捕縛されれば大変な事になるのは明白だ。

「奴は・・・きっとあらゆる天誅事件への関与を喋り出すだろう」

瑞山はそれを恐れている。

・・・己を利用し、捨てた瑞山を、きっと恨んでいるであろうから。

幕府は鎖港交渉の状況を朝廷に報告しなければならなかった。それは将軍後見職・一橋慶喜の役目であり、そのために京へと向かっているのだ。

だが、同時に朝廷は将軍・徳川家茂にも再上洛を命じてきたのである。

「公武合体を強固にするために上洛せよ」

しかし幕府は将軍の再上洛に消極的である。一層、徳川家を貶める事になるからである。上洛辞退を朝廷に申し入れ、将軍後見職だけを上京させると朝廷に伝えた。

だが朝廷はそれを認めず、将軍の上洛を再度命じてきたのである。

幕府は困惑した。

「決して将軍の再上洛を受け入れるべきではない！」

老中達は将軍上洛を徹底的に拒む姿勢を見せており、心の底では公武合体を望んでいる将軍家茂は結論を出せずにいた。

— 京 —

政変後の朝廷は公武合体派で固まっていた。

十月になると藩兵一万五千を率いた島津久光が入京し、その大行列が忽ち京の空気を変えていく。

・・・支配者が長州藩から薩摩藩へと代わったのだ、と。

京の人々は強烈にそれを実感した。

堂々入京した島津久光は即座に動いた。早速、鍵を握る中川宮に接触し、こう建白したのである。

『天皇にも朝廷にも天下を睨み、永世の基本となるような遠大な見識を持って日本国の方針を示して頂きたい』

そもそも中川宮と島津久光は繋がっており、中川宮はそれを天皇に伝えた。

そして孝明天皇は自らの考えとして、こう返答してきた。

『公武合体を支持し、大政は将軍に委任する。また不十分な武器や武力による無理な攘夷戦争は回避し、真の攘夷を行うべし。・・・京から堕ちた七卿は害の基となるので帰京させて嚴重なる処置を下すように』

それが天皇の考えであった。

・・・公武合体の支持、幕府への政権委任、そして無謀な攘夷戦争の回避である。

しかし島津久光はまだまだ不満だった。

更に中川宮と話し合い、合意の上で再び天皇にこう返した。

『旧来の考えを改めなければなりません。よって日本の方針決定は公武合体による列藩賢侯の合議制とすべきです』

新秩序確立のため賢侯による合議政体の必要性を提案したのである。

島津久光の動きは速い。

「松平春嶽公も同調させよ」

・・・長州ら尊王攘夷派がない今こそ、賢侯による新政体の立ち上げる絶好機なのだ。

それらの実現について春嶽の考えを確認するため、家老・小松帯刀を福井藩邸に送り込んでいたのである。

小松帯刀は春嶽との接触到成功し、こう切り出した。

「既に一橋慶喜公は江戸を発たれたと聞いています。だが公武一和を成すためには、将軍・家茂公も上洛されなければ難しいと考えます」

久光と中川宮の意見は一致していると伝えると、春嶽も同調してきた。

「確かに将軍の上洛が最も望ましい。・・・幕府は私を捨て、公の天理に基づいて国是を決定すべきだと将軍が認める事が肝心だ」

「そして有力諸侯に揃って頂く事」

と帯刀が提案すると、

「足並みは危ういが」

と返され、帯刀は言った。

「一橋慶喜公は京に向かっており、伊達宗城公は大坂にまで来ておられます。あとは山内容堂公だが、未だ上京の見込みがない。・・・そんな状況ですが、我が島津久光公はまず一橋慶喜公の到着前に、慶喜公を除いた者で概ね定めておきたいと申しております」

と久光の考えを示した。

「・・・そうだな」

まず幕府抜きで・・・、春嶽もそう考えていたのだ。

「また長州藩と七卿の処置も決定せねばなりません」

「その辺りは朝議次第であろうが、新たな政体として衆議の決定による合議制を認めてもらう事が肝心」

あくまでも一橋慶喜から山内容堂までを含めた賢侯による合議制を春嶽は求めていたのだ。

それが横井小楠の主張していた、朝廷や幕府、賢侯などによる話し合い体制なのである。

・・・将軍再上洛。

・・・列藩賢侯合議制。

ともあれ双方の意見は一致した。つまりそれは中川宮、島津久光、松平春嶽という三者の基本合意ともなったのだ。

こうして島津久光の根回しによって、京に新政体が誕生しようとしていた。

・・・全てが島津久光の主導に見える。

しかし実のところはもっと強い力が働いていた。表には現れてこない強い力が彼等を今後予期せぬ方向へと動かしていくのである。

薩摩藩との話し合いの後、松平春嶽は京都守護職・松平容保を伴って中川宮を訪ねた。尊王攘夷派から最も嫌われていた三者の揃い踏みである。

・・・越前は『朝敵』、会津は『奸賊』、中川宮は『陰謀』と呼ばれていたのだ。

春嶽が、

「薩摩藩からの遣いが、貴方と久光公とで合意したという話を持って来られました」と中川宮に尋ねると、

「そうですか。確かに私は久光殿とある取り決めをしました」

「そこで、まずお尋ねしたいのは、八月十八日の政変の件です。実のところをお聞かせ願いたいのです」

春嶽は久光がどこまで主導権を握っているのか知りたかったのだ。

「あの時、尊王攘夷派による天皇の親征計画が進んでいました。どうやら三条らは大和行幸の前に京を出発し、五条を制圧していた中山忠光ら天誅組と合流するつもりだったようです。そこから勢いに乗じて畿内五国を治めて、そこへ天皇が行幸される。そして長州が朝軍となる手筈だったのです」

「あの長州が朝軍となり、・・・つまり幕府が朝敵になる・・・」

「日本がひっくり返す計画だな」

春嶽は首を振った。

「長州藩は幕府に付いている小倉藩の制圧も企てるなど、明らかに奴らは増長していた。・・・つまり内乱の危機、日本分断という危険が迫っていたのです。・・・そこに異国勢が乗じて上陸でもしてくれば一大事になる・・・。そこで会津と申し合わせて参内、奏上し、打ち合わせ通り会津・薩摩に出動してもらったという訳だ」

「なるほど、そして三条ら尊王攘夷過激派を長州まで落としたという事か」

・・・中川宮が主導、春嶽はそう理解した。

「我が心はとても痛んだ・・・、だが大事に至らなかったのは幸いであった」

中川宮は国の乱れを嘆き、心底恐れていたのだ。平安を常に願って動いたのである。

春嶽に尋ねた。

「では春嶽殿に尋ねるが、越前による挙藩上京計画の真偽は如何か？ 京を制圧し、長州に替わって朝廷を牛耳るつもりだったのか？」

「天皇守護のためです！」

春嶽はキッパリと否定した。更に、

「越前は京に程近く、祖先以来、万一の場合には速やかに京に馳せ登る心得があるのです。いつ大坂湾に異国船が現れるのか、どのような変事が起こるのか、常に覚悟を致しておるのです。

・・・確かに、京に上って武力で激徒を排除すべしという声があったのも事実です。だからこれを聞き付けた尊王攘夷派が我が越前を朝敵とまで申すようになったのでしょう」

その目には嘘も偽りもない。

それを受けて京都守護職の松平容保が、

「その際には我が会津が越前の上洛を遮り、越前に帰国させよとの内命が下っていました。もしも帰国が聞き入れられない場合は、死をもって朝命を支える覚悟でした」

と明かす。越前軍と会津軍の一戦となっていたかもしれなかったのだ。

「そうならなくて良かった」

安堵する春嶽と容保。両者はそんな互いの表情に笑い、中川宮はこう明言した。

「この度の賢侯上京による協議の件だが、その場には幕府側の代表として一橋慶喜公を加える方向で進めている。慶喜公にもそのつもりで上京するよう伝えてある。・・・我が皇国の基本を立てるためにはそれら賢侯を中心にした公武合体体制で尽力するのが最善なのだ！」

春嶽と容保も頷き、

「我々は何のような命令にも尽力するつもりです」

容保はそう応えたが、春嶽はやや渋い顔を見せている。

「・・・ただ」

「何だ」

「一橋慶喜公は気質にやや難がある」

春嶽はそこを心配しているのだ。

だが公武合体上、幕府側の代表として一橋慶喜を外せないのは当然なのだ。そして将軍にもそれらを認めさせて天下に公武合体を示さねばならない。

それは春嶽もよく解っている。

・・・今こそ賢侯達が主導権を握る絶好機なのだ。これまでは賢侯が入京しても長州藩ら尊王攘夷派に振り回され、利用され続けてきたただけだったが、今の京には長州も尊王攘夷派もいない。公武合体派の絶好機なのである。公武の力を結集して、日本の舵取りを始める機会が巡ってきたのだ。

三者は賢侯合議制を大方針として公武合体体制の確立を約束した。

新体制の中心は天皇。

実権は中川宮を中心とした朝廷と賢侯。

日本の行く方向は攘夷ではなく、開国による異国との共生。

中川宮は賢侯を召集する朝命を下した。

薩摩藩の島津久光、福井藩の松平春嶽、会津藩の松平容保は既に入京している。あとは土佐藩の山内の容堂、宇和島藩の伊達宗城、幕府の将軍後見職・一橋慶喜を召集するのみである。

彼等に朝廷の『参豫』という地位を与えて、天皇隣席の朝議にも参加させるつもりであった。

・・・まさに日本の全権を担う決定機関となるのだ。

将軍・徳川家茂がこの公武合体と賢侯による政体を認めれば、今後は京を中心に日本は動き出すだろう。

・・・これが徳川幕府の終焉と新体制の確立の第一歩なのだ。

そしてまず賢侯達がすべきは、天皇の攘夷方針を完全に打ち消す事からであった。

薩英戦争を経験して、西洋文明の持つ先進的な攻撃力に驚異を覚えた薩摩藩・島津久光は、西洋の持つ強大な力と先進技術を欲するようになった。

・・・かつて島津斉彬が推し進めていた西洋技術による近代化。

その必要性を漸く理解したのである。

「そのためには、まずイギリスとの間に友好関係を築かなければならない！」

五代才助こと五代友厚、そして松木弘安こと寺島宗則の二人が嘗てそう進言してきた真意を漸く理解してした。イギリスと結託して薩摩を危機に陥れた二人だったが、彼等の主張が全くの的外れではなく、将来を見越しての発言だったと気付いたのだ。

「イギリス大使と接触せよ！」

久光はそう命じていた。

そして十一月一日、薩摩藩主・島津茂久の使者として藩士二名が英国公使館へと送られたのである。

— 横浜・居留地 —

薩摩藩の使者はイギリス代理公使ジョン・ニールと会見し、

「我が薩摩藩は生麦事件の賠償金七万両（十万ドル）を支払う準備があります」と申し入れ、ジョン・ニールは目を丸くした。

「犯人は見付かったのか？」

「下手人は継続して捜索します。逮捕後は直ちに死罪に処します」

と言い、同じ内容の藩主名による文書を示すと、ニールは納得した。

「賠償問題が解決し、犯人も見つけ次第に処刑するのであれば問題はない」

生麦事件を巡る薩英間の問題が正式に解決できると判断したニールは握手を求め、薩摩側もそれに応じた。

・・・双方納得の円満解決である。

そこで薩摩藩側から、改めてこう切り出した。

「今後は友好関係を築き深めたいと我が藩主は望んでいます。そこで我が薩摩藩のために軍艦購入の周旋をお願いしたい」

ニールは驚いた。

・・・こうまで簡単に手の平を返せるものなのか、日本人は。

一瞬、眉を曇らせたが、

「我々も薩摩藩と信頼関係を深めたいと考えている。喜んで軍艦購入を周旋しよう」

ニールはそう言ってくれたのだ。

それまで厳しい表情を崩さなかった薩摩側の使者も安堵の笑みを零す。

「では書面で」

「分かった、約束しよう」

ニールは確約する書面を交付してくれたのである。

ここから薩摩藩はイギリスと親密になっていく。

五代友厚と寺島 宗則が思い描いた通りに進み始めたのだ。いや、彼等に知恵を授けたイギリス商人の思惑通りに。

イギリスの権力者にすれば日本国内に内乱を起こし、それに乗じて主権を握ろうと考えていただけに、薩摩へと軍艦や武器兵器を流す事で日本国内に戦争の危機を作り上げる事に異論はない。ましてやアメリカ南北戦争が終焉する事によって武器は有り余っているのだから、イギリス商人もそれを高値で売り捌けば大儲け出来るのだ。イギリス経済にも好影響だろう。それがイギリス側の読みである。

・・・そもそもイギリスは日本の植民地化を目論んでいるのだ！

けれどイギリス国内の有識者は、日本の植民地化に反対していた。日本は文化も精神性も高度で、決して未開国ではないと理解したからである。日本人は誇り高き武士の精神を持ちつつ、神国を穢さぬ気高きも持ち合わせているのだ。それを知ったイギリスの民意は日本への直接的軍事介入を望んではいなかった。

世界中に植民地化を進める大英帝国であっても、日本という国だけは特別なもの、決して侵してはならない崇高な国だと感じていたのである。

十一月十五日、江戸城で火災が発生した。

火の手は本丸・二の丸・西の丸を焼いて鎮火したが、焼けた江戸城の姿は追い詰められた幕府の現状を示しているかのようであり、その有り様を目の当たりにした人々は徳川家の行く末を案じるばかりであった。

それから四日後、その一報が京に届いた。

「何だと！ 江戸城が焼けただと！」

入京していた賢侯の松平春嶽、伊達宗城、島津久光、松平容保はただならぬ状況を察して急遽集まった。

無論、その対処策を検討するためであるが、その表情は曇っていた。

「火災の被害は大きくない。将軍も無事らしい」

「原因は？」

「不明だ」

疑念が残る。

「将軍は上洛できるのか？」

「そこだ、被災を理由に上洛しないおそれもある」

「江戸城の幕閣は保守的だ。きっと将軍上洛の延期を申し入れてくるに違いない」

老中達は公武合体を望んでいないのだ。

この時期、江戸城保守派と改革派の将軍後見職・一橋慶喜とはまるで水と油である。京に集った賢侯達は改革派の慶喜を受け入れて江戸城の保守派を見限っていたが、その江戸城の幕閣が将軍上洛を阻止しようとしてくるだろうと懸念していたのだ。

「・・・尊王攘夷派が力を失ったこの時期に将軍が上洛して、公武の合体を強固なものにしなければならない。その好機なのだ。・・・なのに肝心の将軍が上洛しないとなれば、その綻びを突いて尊王攘夷派が反撃に転じるやもしれない。そんな隙を与える事になってしまうではないか」

賢侯達は焦った。

そこで江戸城に対してこう命じたのである。

『江戸城火災を理由に将軍の上洛延期は認めない。将軍は速やかに上洛せよ』

十一月二十六日、将軍後見職・一橋慶喜の行列が京に入った。江戸でかき集めた兵に守られながら漸くの入京である。

それを知った松平春嶽は直ぐに二条城を訪ねた。

一時は政事総裁と将軍後見職として幕府の両輪だった二人であるだけに、互いの良いところも悪いところも分かっている。

「鎖港交渉は進んでいるのか？」

と春嶽が尋ねた。

「八月に起こされた朝廷の政変が江戸に伝わり、尊王攘夷派からの圧力が遠ざかった事で、異国

への鎖港談判は弛んでいます」

慶喜はそう答えた。

「そうか。今の京は、天皇も中川宮も公武合体を望んでおられる。よってこの度は強情を出さず、公武の合体を成功させる事に協力して欲しい。・・・それともまだ島津久光公を疑っておるのかな？」

と言って春嶽は慶喜の顔色を伺う。

反徳川の筆頭として振る舞う外様の大藩・薩摩の島津久光を敵視しているのも当然なのだ。

だが慶喜は平然として、

「徳川家としては薩摩を嫌い、疑っているでしょうが、疑っても益なきゆえ、最早疑わぬ心得です。・・・ですから協議の場に久光殿もお呼びした方が良からうかと私は考えています」

と答えた。

春嶽が更に踏み込む。

「江戸は旧習に固結しておるようで、旧来の幕府体制に戻したいという心底が透けて見えておるようだが・・・」

少し顔を歪めて慶喜はこう漏らした。

「確かに閣老の言い草は酷い。・・・私が朝廷と謀って将軍に立とうとしているとか、将軍に毒を盛る計画があったなどと言いつらしている始末です。私がそんな事はないと将軍に訴えても聞き入れられない。・・・私は江戸成で孤立しておりました」

弱音とも取れる言葉だった。

「そうか、驚き入るな。・・・閣老はあてにならないか」

「いかにも」

・・・確かに今の幕内はバラバラで、幕閣の自己保身も強い。そう理解している。

ある面、春嶽は慶喜に同情した。

・・・しかし一橋慶喜にそれを撥ね除けるだけの気迫も覚悟も見えないのは、今後に不安が残る。

(それが問題にならねばよいが・・・)

春嶽は掴みかねる慶喜の性格に首を傾げたくなくなっていた。

それから約ひと月後の十二月二十二日、松平春嶽は再び一橋慶喜を訪ねた。

・・・たとえ幕内で孤立していようとも、慶喜は幕府の筆頭・将軍後見職なのだ。彼の本心をよく理解しておかねばならない。

春嶽がこう投げ掛けた。

「将軍の上洛があれば、公武の間に横たわる雲霧は即座に消散し、公武合体は強固なものとなろうが、問題は時勢に適した政体をどうするかだ！」

慶喜は答えた。

「確かにそれが一番の問題だな」

「それを確立せねば日本国は永遠の治安を手に入れる事が出来ない。在京諸侯と協議の上で確定すべきだと考えるが」

と春嶽が説くと、

「同感だ」

と慶喜もそれに同意した。だが、

「旧来のやり方や決め方を壊して脱却すべきであろう」

と春嶽が口にすると、

「だがそれは幕府役人の最も嫌うところだ」

慶喜は難しい顔をした。すると春嶽は、

「そうは言っても、実際の成否は一橋殿の方針次第で決まるのではないかな」

と慶喜にその覚悟を求める。

幕府筆頭の一橋慶喜にその覚悟が決まっていなければ、賢侯協議の場を開いても何も決められないし、決まらないのだ。・・・それを問い詰めに来たのである。

慶喜は一層渋い顔を見せる。

無言の慶喜に対し、

「まもなく容堂殿が入京される。そこで参豫となった我等五侯による会議を二条城で開くつもりだ。その場で幕府としての方針をハッキリさせてくれ」

そう伝えた。

これから始まる賢侯協議の場が、今の日本の最高会議なのである。

その頃、土佐藩の汽船・南海丸が大坂沖に現れていた。

賢侯最後の一人、山内容堂が乗っている。

そして年の瀬も押し迫った十二月二十八日、山内容堂は入京した。

これまでは上洛を求める勅を受けても、病を理由にして上京を延期し続けてきていた容堂だったが、島津久光や松平春嶽からの上京催促状が繰り返し出され、いよいよ観念したのであろう、遂に京へと出向いて来たのだ。

ともあれ舞台は整っている。

役者も揃った。

さあ、日本の行方を決める顔触れが揃ったのだ。

そして十二月三十日、朝廷より沙汰が下った。

『一橋慶喜、松平春嶽、松平容保、山内容堂、伊達宗城の五侯は参預を務めよ』

参預（さんよ）・・・、それは朝廷の職務名である。賢侯を朝議に加えようとする薩摩藩の島津久光が提唱し彼等に職責を与える事にしたのだ。

だが、その島津久光自身は参預に任命されていない。それは何故か。久光自身が辞退したからである。・・・全ては島津久光の思惑通りに事が運ばれている・・・と幕府に勘繰られたくなかったからであった。

実際のところ、その久光の後ろには中川宮がいる。

それは誰しもが理解している。その顔色を窺いつつ事態は進めなければならない。

・・・果たして島津久光と中川宮は一枚岩となり得るのだろうか。

そこが分からない。

・・・賢侯を集めた彼等の思惑はどこにあるのだろうか。自己の権力欲求なのか。それとも日本の未来への改革なのだろうか。

多くの疑念を生みながら、こうして日本の政局は完全に京へと移ったのである。

「京で起こされた政変は不正であると伝えて、我が長州の誤解を解くのだ。そして世子・毛利定広の入京を認めさせよ」

上京して朝廷に嘆願書を提出せよと藩主・毛利敬親は命じていた。

今は長州藩士も藩主すらも入京させないと朝廷は決めているが、

「そもそも毛利定広の入京は政変が起こる前から決まっていた事ではないか」

そこで家老を送り込んで交渉させるつもりなのだ。

その嘆願行動に対して藩士からは過激な意見も飛び交っている。

「もしも家老の入京すら許さないのならば、直ちに挙兵して上京すればいい！」

そこまで怒りと不満が膨らんでいるのを藩主・毛利敬親はヒシヒシと感じている。やがてその不穏な空気が長州を支配し、暴走へ、自滅へと向かっていくであろう事を藩主・毛利敬親は最も恐れていたのがあった。

「憎っくきは薩摩と会津、そして中川宮だ！」

京を追われて長州に落ちた尊王攘夷派は、その後の京を黙って指を食わえて見てる訳ではない。反攻の機会を窺って諜報活動を強め、反撃するための体勢を構築するべく暗躍していたのである。

「尊王の総本山たる水戸藩と手を組め！」

予てより、水戸と長州の間には水長の盟約がある。あの桜田門外で大老・井伊直弼を討つ際に結んだ『成破の約』である。

その窓口であった桂小五郎が江戸に赴いて水戸過激派に接触した。

幕府によって力を削がれていた水戸の尊王攘夷派であったが、軍資金を渡され、

「尊王攘夷を喚起し、東西呼応して挙兵すべし！」

と小五郎から結束を求められると、それを誓った。

そして水戸に戻るなり、有志を集め始めたのだ。

こうして尊王攘夷派は反撃の体勢を整えていく。

だがその一方では長州藩内部に問題が生じていた。

これまで通りに尊王攘夷で良いのかという疑問が生まれ、藩論が二分し、派閥による対立が起こって抗争を繰り広げる様相を呈していたのである。

・・・改革派と保守派。

もう長州は一枚岩ではなくなった。

改革派は吉田松陰の流れを汲む尊王攘夷と倒幕を主張する一派の事で、桂小五郎、久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤俊輔らがいた。そして藩の政務役筆頭の周布政之助が彼等を擁護しており、彼等は自らを正義派と呼んでいた。

対する保守派は、旧来通り幕府に恭順しようとする佐幕勢力である。吉田松陰一派はそれらを

俗論派と呼んで見下していた。

保守派も黙ってはいない。過激に走る改革派に向かって、
「我が長州藩が苦境に陥ったのは、無謀な尊王攘夷に固執する改革派の主張を受け入れてきたからだ！」

と口撃し、改革派重臣の周布政之助らを罷免するよう藩に訴えたのだ。その結果、藩は周布政之助ら三名の重臣を政務役から下ろす事を決定したのである。

これに奇兵隊総督の高杉晋作が激怒した。

奇兵隊を動かして藩庁への脅しを繰り返し、周布政之助らの復帰を強烈に求めたのだ。

すると藩庁は手のひらを返し、一転して周布政之助らを政務役に返り咲かせ、高杉晋作も政務役に任命したのである。そして保守派には厳しい処分を下し、隠居や遠島、死罪を言い渡したのだ。

こうして長州藩の藩論は、再び正義派を名乗る尊王攘夷改革派が握るのだ。

藩主の毛利敬親もそれに追従した。

「これまで通りに尊王攘夷を突き進めよ！ 諸隊はその重要な戦力であり、その頂点にいるのが奇兵隊だ！」

毛利敬親は信じている。

・・・徳川幕府に牙を剥き、西洋諸国をも敵に回して戦う我が長州藩にとって、奇兵隊の強引きこそが浮上の原動力なのだと。

(だが・・・奇兵隊は制御が利かない。・・・我が藩にとって最善策と成り得るだろうか)

その憂慮が脳裏を掠めるが、もう後には引けない。きっと藩主自らが異を唱えたとしても彼等は止まらないだろう。藩主を殺し、もっと都合のよい藩主を立てるに違いないのだ。

・・・人を殺す事、利用する事に罪悪感など無い。手段は選ばない。あるのはただ尊王攘夷という大目標へと突き進む気概のみである。

天皇を中心とした神国の尊厳にとって障害となる徳川幕府は倒してしまわねばならない！

そんな狂気の集団が吉田松陰一派であり、高杉率いる奇兵隊なのだ。

しかし遂に、藩主・毛利敬親の抱いていた杞憂が現実化してしまうのである。

京から長州へと落とされた志士達も苛立っていた。

「長州藩世子・毛利定広と共に長州軍五万の大軍で京へと出兵するのだ！ 海峡の護りは長州の支藩に任せればいい！」

・・・そう主張したのは真木和泉である。

計画の詳細を次のように説明した。

「長州軍は海路で大坂に上陸し、大坂城を占領して敵の糧食を絶つ。河内から入った別動隊が民衆と共に立ち上がり、大坂勢と共に京へ進軍。・・・更に別の隊を密かに入京させて、二条城ほか各所そして彦根城を焼き討ちにし、琵琶湖東に集結して東山から北陸道までを封鎖。・・・また会津藩の背後をついて東北地方でも挙兵し、幕府軍の目をそちらに向ける。・・・そこで入京した世子・毛利定広が中川宮の罪を訴えて公家達を立ち上がらせるのだ」

と言い、

「それが無理な場合は京の周辺に軍を展開し、政変の不正を訴えて諸侯に長州擁護を懇願する。その上で兵を宮中に入れて再度政変を起こす」

とも言う。

「そうせい」

藩主・毛利敬親は世子の上京を認め、京で戦う事を藩士や諸隊に決意させた。公卿達や浪士達も盛り上がっている。

・・・だが朝命に逆らう事になる。

それを藩庁は恐れて、

「短絡的な率兵上京は避けねばならない。計画の鎮静化に努めよ」

と、真木和泉の主張する過激行動を抑え始めた。

周布政之助・桂小五郎・高杉晋作ら改革派も挙兵暴発に反対の声を上げる。

「まだ早い」

真木和泉を抑えた。

同時に京である噂を流し始めるのである。

— 京 —

流言が口から口へと移っていた。

『・・・孝明天皇は三条実美に大政を委任するつもりで密旨を下していたが、政変によってそれはなくなった。つまり政変は、孝明天皇の意向を無視する中川宮・会津藩・薩摩藩による陰謀だったのだ・・・』

というものである。

孝明天皇もその流言を耳にし、忽ち否定したが、真に受けた民衆は中川宮への不信感を抱いた。

それだけでは済まない。

『・・・中川宮には皇位篡奪の意志がある。そして宮に二千石の家領を増やした幕府に加担し、会津藩と手を組んで、天皇への呪詛や毒殺を企てているのだ・・・』

という内容の中川宮への誹謗中傷が流され、張り紙がされたのである。

それを孝明天皇も見せられた。

・・・噂と張り紙。

それらが続くと嘘が嘘でなくなってくる。朝廷内の公家達の間で中川宮への疑いが膨らみ始める。

朝廷内の分断工作であった。

孝明天皇は中川宮と話し合いの場を持った。

「浮説の真偽を尋ねたい」

天皇の方からズバリそう尋ね、中川宮はキツパリこう答えた。

「事実無根です。天皇と私の離反を目的としたものでしょう」

天皇は頷いた。

「端から宮を疑ってはいない。今も深く信頼しているのである。よって疑心を起こさず、今後も変わらず扶助するように」

との言葉を与えたのであった。

その後も張り紙は続き、遂には、
『中川宮に天誅を下す！』
と書かれたものが三条大橋に張り出されていた。

中川宮への犯行予告である。
「尊王攘夷派によるものであろう」
それに対応すべく一橋慶喜、松平春嶽、伊達宗城、松平容保が話し合いを行った。そして中川宮を擁護する上書を諸侯連署で提出する事にし、草稿は薩摩藩と越前藩で作成することになった。薩摩は小松帯刀、越前は中根雪江らがこれに当たるのである。

ともあれ新政体となった賢侯達は、暗躍する長州藩士や攘夷浪人から中川宮の身を守るべく必死であった。

・・・それ程に、中川宮は日本にとって重要な人物だったのである。彼らはそれをよく理解していたのであった。

当の中川宮は、独自に張り紙の犯人を探っており、目星をつけていた。
(・・・尊王攘夷の志士、恐らくは水戸者による仕業か)
常々、京に留まっている水戸藩士の事を気にしていた。
そもそも彼らは、水戸の徳川慶篤が入京した際にお伴として連れてきた藩士達であるが、その後、慶篤が江戸に戻り、彼等を監督すべき立場となったのが慶喜の兄・松平昭訓であった。だがその松平昭訓が死去したため、彼等を統率する者がいなくなっていたのである。
(尊王攘夷に染まった彼らは勝手に動いている。・・・長州と繋がっているに違いない)
・・・本圀寺党と呼ばれる水戸藩士であった。

長州藩の桂小五郎や久坂玄瑞と接点がある危険分子であり、新撰組の水戸出身・芹沢鴨とも通じていただけに、その行動には不穏さが見え隠れしている。

そんな彼等の不穏さを中川宮は嗅ぎ付けていたのである。
「水戸藩は尊王攘夷の総本山である。長州藩がいなくとも水戸藩士が京に留まっていれば公武一和の妨げになる。そして本圀寺党は長州藩から支援を受けているらしい。・・・即刻退去させるべきだ」

と主張した。

賢侯達も同感だった。水戸藩出身の一橋慶喜もそのあたりをよく理解していた。
「諸藩の尊王攘夷派が、水戸藩を頼って集結し始めている。・・・確かに危険な状況だな」
そして慶喜は、まず野放しになっている水戸藩士を統率するべく弟の徳川昭武を上京させる事を約束し、水戸藩にそう命じた。だが昭武が上京するまでの間、彼等を抑える者がいないという問題が残る。

そこで中川宮は一橋慶喜にそれを命じた。・・・『慶喜公が水戸藩士を統率せよ』
こうして慶喜と本圀寺党が結び付いた。

実は、慶喜には別の考えがあり、本圀寺党が彼の配下に収まるのも想定していた事だったのである。

薩英戦争で蒸気船を失った薩摩藩は幕府から長崎丸という商船を借り受けて、藩の特産品を諸藩に売り捌いていたが、それは問題ない。

ところが実際は諸外国と交易していたから、それが大問題だった。

長崎丸は二日前に乗組員六十八人を乗せて兵庫を出航し、長崎へと向かっていた。そして文久三年十二月二十四日夜、事馬関海峡を通過しようとしていたのである。

船内には諸外国へと流すための綿、油、鉛などの物産品、そして御用金百五十両を積載しており、それらを長崎に持ち込むと同時に船の修理をする予定であった。

・・・だが、この日の馬関海峡は冷たい雨と雪が入り交じり、深い霧に覆われて、とても視界が悪かったのである。

「この海峡は長州藩奇兵隊が睨みを効かせている。注意せよ！」

と言って帆柱に大提灯を掲げさせた。

長州勢はこれまでは海峡を通過する異国船に対して砲撃し、幾度も損傷を与えてきているだけに、ここを通過する際は誰でも不安が付き纏う。

だが長州勢は西洋の反撃に会い、西洋艦隊から強烈な反撃を受けて壊滅的な被害を被っているはずである。それに加えて長州藩は京から追いやられ、藩論を掌握し牽引してきた尊王攘夷過激派は急速に力を失っている。最早、海峡封鎖を継続する力など残っていないと誰もが思っていた

。そんな馬関海峡に薩摩藩の長崎丸が差しかかったのだ。

海峡は沈黙していた。

・・・けれど、奇兵隊は死んでいなかった。

「灯籠を狙え！」

ドーン、ドーン！

壇ノ浦台場から火線が走った。長崎丸を砲撃してきたのである。

船上の薩摩側は慌てた。

「この船は異国船ではないぞ！ 我等は日本人だ！」

と叫んでみても無駄だった。

奇兵隊の砲撃は止まず、一層激しくなっていく。

「全速力で逃げるんだ！」

長崎丸は東方の山陰に向かって回避行動をとった。

・・・だが長崎丸は被弾した。

三発！

船は出火し、遂には沈んでしまった。

乗組員は海に投げ出され、多くは自力で陸にまでたどり着くか、近くに停泊していた肥後藩の船に助けられたが、二十八人は行方不明になった。溺死である。

薩摩藩からすれば積載物は勿論、乗組員の命までも失われた大事件である。

一報を受けたと薩摩藩はいきり立った。

「長州に使者を送れ！ 和戦を決すと伝えよ！」

すると長州藩庁は即座に使者を薩摩へと送り、事態の收拾に動く。

『雨に雪、そして濃霧が重なり、薩摩藩船と視認出来ず、外国船と誤って砲撃したものである』と謝罪したが、そもそも、この長崎丸沈没事件には不可解な点があった。

そもそも・・・長州側は濃霧で確認出来なかったと主張しているが、意図的な砲撃ではなかったのか？

確かに過去、長州藩は馬関で無差別に蒸気船を砲撃した時期があったが、その後は昼間なら旗章を掲げ、夜間なら帆柱に大提灯を掲げていれば砲撃されないという約束事が諸藩と出来ていたはずである。

・・・つまり長州藩はこの合意に違反して砲撃したのではないのか。

そこが疑惑である。

長州側には、・・・京の政変によって受けた薩摩藩への怨みという本音があるのではないのか。だから異国船と誤認した振りをして薩摩の長崎丸を意図的に砲撃したのではないのか。

そんなところであろう。

無論、薩摩側の大激怒が収まるはずがない。

よってここから薩摩と長州は全面戦争へと向かって動き出すのである。

— 京 —

「愚か者めが！」

薩摩から事件の報告を受けた一橋慶喜は激怒していた。

「国内で戦争が勃発する危機を西洋人は待っているのだ。両藩が激突するのを西洋諸国が望んでいるのは明らかであろうが！」

・・・国内で戦争を焚き付けて大混乱に陥れ、その勝者側と手を組んで実権を奪い取ってしまうのが西洋人の侵略形態なのである。

参豫となった賢侯達は事件の対応を協議した。そして、

『長州藩の罪は後に取糾する』

と決定し、

『よって薩摩藩は使者派遣を見合わせよ』

と薩摩藩邸に伝えたのである。

これで当面、薩長戦争の危機は薄らいだかに思えた。

だが、まだまだ予断を許さない状況もある。長州側からの申し出を受け、朝廷支配や攘夷行動、長崎丸砲撃事件を含む海峡封鎖などについて長州藩家老から訊問する事になっているのだ。

・・・長州が落ち度を認めるとも思えない。

両藩の心の底に、強い怒りがある限り、丸く収まる事は考えにくい。

薩摩藩もただでは転ばないだろう。この事件を利用して、藩の近代化を加速させるべく動き始めている。

まず長崎丸の航海士が多数死亡した事を理由にして、幕臣・中浜万次郎を三年間招き入れる事を幕府に認めさせたのだ。彼を西洋文化に詳しい彼を藩の洋学校の教授として招き入れて、航海術や英語教育に力を入れ、また異国との交渉にも関与させて新型蒸気船の購入にも役立たせようというのだ。

・・・そして後にこの流れの延長線上で、坂本竜馬ら海軍塾生が薩摩に引き取られるようになるのである。

日本の中心が京に移ったものの、日本侵略の攻勢を進める異国人達は江戸に程近い横浜の居留地で足場を固めており、そこでまたも国際的な事件が起こってしまったのである。

九月の事、フランス陸軍士官アンリ・カミュら三名が愛馬に跨って横浜郊外を探索していた際に、井土ヶ谷という村で攘夷浪士に襲われ、惨殺されてしまったのである。

・・・生麦事件の再来であった。

イギリスと繰り返された交渉と戦争、巨額の賠償金支払いを再びフランスとの間で始めなければならないのだ。幕府は頭を抱えた。

そして怒れるフランスは当然の如く幕府に巨額の賠償を求めてきており、十月、幕府とフランスとの間で事件の賠償交渉が始まった。

交渉に当たるのは元老中・田沼意次（おきつぐ）のひ孫に当たる若年寄・田沼意尊（おきたか）である。その田沼は賠償交渉とという重要な役目が課せられていたが、同時にフランスとの鎖港交渉を進めるという最も厄介で重要な交渉も背負わされていたのだった。

・・・賠償交渉と鎖港交渉。

（二つの重要案件を解決しなければならないのか。京の参豫会議では、天皇に攘夷を放棄させようという動きがある事も承知しているが、幕府は鎖港交渉の継続を朝廷と約束しているのだから、現段階で鎖港交渉を止める事はできない。鎖港交渉を止める事は天皇や朝廷への裏切りとも取られかねないのだ）

・・・今の幕府は立場が弱いだけに、京を敵に回したくない。

田沼は悲壮な覚悟をもってフランスとの交渉に挑もうとしていた。

一方のフランス側も頭を抱えていた。公使ベルクールはフランス本国に艦隊を派遣するよう求めたが、本国は大艦隊を日本へ差し向けられないと言ってきたのである。

（もしも日本側が強硬に出てきた場合でも、アメリカやイギリスのように大艦隊を見せ付けて交渉を優位に進める事が出来ないではないか）

好戦的な公使ベルクールは困ってしまった。

そんな状況下でイギリスのように賠償を勝ち取らねばならないのであるから。

一 その2 一 フランス公使ベルクールからの提案

一 フランス艦内 一

横浜に停泊中の軍艦において、フランス公使ベルクールと田沼意尊は対峙した。

無論、フランス陸軍士官ら殺傷事件の賠償についての交渉であるが、そこで日本側から意外な提案があり、ベルクールは目を剥いた。

「殺傷事件の賠償問題に加えて、横浜港の鎖港交渉を進めたい」

と言うのだ。

暫しの沈黙の後、ベルクールはこう返した。

「我らは賠償の決着が第一なのだ。そのために殺害事件の謝罪使節をフランス本国に派遣する事を私は希望する。・・・そしてその際に鎖港交渉を切り出してはどうだろう」

・・・鎖港など出来るはずがない。フランス本国に行けば日本側も強気には出られまい。

ベルクールはそう考えたのである。

・・・賠償交渉と同時に鎖港交渉を進めたい幕府。・・・本国に日本使節が出向いてくれば、大艦隊を極東にまで動かさずに済むフランス。

どちらにとっても願ったりなのだ。

賠償問題と鎖港交渉について、使節をフランス本国へ派遣する事で双方は合意した。

一 江戸城 一

フランス側との交渉結果を受け、幕府は横浜鎖港談判使節団をヨーロッパへと派遣する事を決定した。

正使は外国奉行となった二十八歳の池田長発（ながおき）、副使には四十四歳の河津祐邦（すけくに）を任命し、河田熙（ひろむ）をその目付とした。外交を目的とした総勢六十名を超える大使節団である。

そして十二月、横浜鎖港談判使節団は神奈川沖のフランス軍艦ル・モンジュに乗り込んだ。

通訳としてフランス公使館のブルックマンが当たってくれる事になっている。

使節正使の池田長発は強い覚悟を持っていた。

「フランス陸軍士官ら殺傷事件の賠償問題を確実に解決して来なければならない。いや、それ以上に重要な使命がある。横浜港の永久鎖港をフランス本国に認めさせなければならない。・・・もしも失敗すれば腹を切らねばならん、その覚悟を持って臨まねばならない程に重要な外交交渉なのだ。日本にとって・・・」

失敗は許されない。

しかし極めて難しい交渉になるのは明らかだ。

・・・待っているのは驚嘆か、嘆きか。

・・・この鎖港談判使節一行がヨーロッパをその目で見て、西洋という異文化に触れてどう感じるのか。

いや、西洋の連合艦隊が下関に向かうとの情報を知って、使節一行は慌てふためくのである。

「薩摩の思惑に乗って、上京してはなりません！」

保守的な江戸城の老中達は将軍に上洛反対を訴え続けている。

若干十八歳の将軍は再び迷っていた。

・・・徳川家のためではない、日本国のために何をすべきか。

・・・天皇は繰り返し入京を求めてきている。京に集まった有力諸侯も悲壮な覚悟を持って私の入京を強く求めている。

勝海舟が命を張ってそう訴えたという事実が将軍の心を揺さぶっている。

(勝は信頼できる人物だ)

そして将軍は決意した。

「上洛いたす！」

薩摩が主導権を握っていようとも構わない。再び上洛する事を決めたのである。

でも老中達からはきつく釘を刺された。

「薩摩が主導する形で諸藩による参豫会議なるものが京に出来たばかりか、将軍後見職・一橋慶喜公がそれに加わっている事は承知しかねます。決して薩摩が有利になるような形で物事を決定させてはなりませんぞ」

将軍とは言っても若干十八歳の若者である。物事を分別するには経験が不足している事は自覚している。

(薩摩の動きに注意せねばならぬな。しかし慶喜公も参豫会議に加わっている・・・、誰が信頼できるのだろうか)

微妙な力関係が彼を苦しめる。

そればかりか、京を追われた長州藩の報復にも備えなければならない。

・・・陸路か、海路か。

前回同様に東海道を利用しての陸路上洛が提案されたが、軍艦奉行の勝海舟が海路上洛を提案した。

「日本は海洋国ですから、まず海軍を起こさねばなりません。それには将軍が率先して奨励して頂かねば諸藩は腰を上げぬでしょう。ですから今回の上洛は海路にて、諸藩の軍艦を従える形で入京するのが望ましいと考えます！」

「諸藩を従えてか！」

「そうです。日本の海軍というものを示すのです！」

と海舟はぶち上げた。

この時期、幕府以外にも先進的な諸藩では艦船を持ち始めている。競って西洋から蒸気船を購入していたのである。

しかし藩の連携はなく、各藩バラバラに海防や交易を進めていたに過ぎない。

そんな状況を打破するため、勝海舟は将軍が率いる形で諸藩の艦船を従えて京へと向かう事を

提案したのだ。

「日本海軍です！」

海舟の言葉に将軍・徳川家茂は目を輝かせている。

「よし、それで行こう！」

諸藩の艦船もそれに従って出港する事になった。だが問題が持ち上がった。

・・・自慢の艦船をまともに動かす自信がない、と各藩が言い出したのである。艦隊を組み、そのまま太平洋を航行するだけの十分な技術が伴っていないと言うのだ。

そんな問題がある事を予測していた海舟は、

「では我が海軍塾で教育した塾生を三名ずつ配置させましょう。ですから心配は無用です」と持ち掛け、各藩はそれを受け入れた。

「これで各藩の面子が立つはずだ。塾側としてもより実践的な経験になり、塾生達は一層技術が習得出来る。どうだ、双方共に万々歳だろう」

「さすがじゃ、先生」

京から駆け付けた竜馬は頷いた。

「これを日本連合艦隊の第一歩にするんだよ！」

「日本連合艦隊かよ！」

海舟が望む日本海軍の形が見えてきた。

「それが異国を凌ぐ海軍力になるのさ」

「異国の脅しに負けだけの海軍があれば、日本も見下されんようになる。その形が日本連合艦隊じゃな。そして今回がそのひな形なんじゃな」

「そういう事だ」

竜馬は興奮した。

「凄いちや！ まっこと凄いちや、先生！」

こうして、幕府・諸藩の連合艦隊が編成される事が本決まりとなり、将軍の上洛に合わせて十二隻が船隊を組む事になったのである。

文久三年（1863年）十二月二十七日、将軍家茂は異を唱える幕老を捨て去り、幕府軍艦・翔鶴丸（しょうかくまる）に乗り込んだ。

そして翌二十八日、将軍家茂を乗せた翔鶴丸が品川沖を滑り出す。

・・・いよいよ日本の大艦隊を率いての出航である。

幕府と諸藩自慢の十一隻がそれに続いていた。

艦隊構成は、幕府から五隻、更には佐賀藩・筑前藩・薩摩藩・越前藩・松江藩・加賀藩・南部藩から各一隻の計十二隻という、親藩や外様という垣根を越えた大艦隊である。

まさに日本海軍の形であった。

その中には長州藩の奇兵隊に奪われた朝陽丸もあった。八月十八日の政変によって長州藩内の勢力図が変わり、力を盛り返した穏健派によって朝陽丸は幕府に戻されていたのである。また佐賀藩伝習船だった観光丸も、福井藩の黒龍丸も、竜馬の申し入れを受けて参加し、海軍塾の塾生達がそれぞれの艦船に乗り込んでいる。

そして坂本竜馬は観光丸に乗船していた。

「行けー！ 日本にもこれだけの海軍力があるがじゃー！」

・・・初の日本海軍である。

それが江戸湾から太平洋の大海原へと出て行く。

「異国人よ見てみよ！ もう日本は異国に負けんぞ！」

世界に向けて竜馬は叫んでいた。

太平洋のうねりを受けて艦隊は進み、伊豆下田の港に寄港した。

「時化が来るぞ」

海舟はここで天候の回復を待つよう各艦に支持し、嵐をやり過ごすことになった。

それから四日後、文久四年の元旦をここ下田で迎え、将軍・徳川家茂は十九歳になった。

激変するこの時代にあって若さゆえに利用され、弄ばれるかのように幾度も幾度も京と江戸を往復させられる将軍。・・・過去に例のない悲劇の将軍である。

その後も思うように天候が回復しない。冬の海は荒れ続けている。

・・・陸路へ変更すべきか。

と検討された。だが勝海舟は決めていた。

「日本海軍がこれ位の時化で諦めてどうなる！」

このまま海路で行くべきなのだ。

将軍も海舟の考えを受け入れた。

「行こう、行って日本海軍の強さを示すのだ！」

艦隊は荒海に向かって出航した。

・・・恰も世界という荒波に立ち向かう日本の状況を示しているかのように・・・。

艦隊は陸地から離れた。襲い来る大波とうねりの中、大海原を突き進む。

何とか駿河湾、遠州灘を乗り切って、全艦は志摩の港に入った。

志摩を出ると、伊勢沖から熊野沖を通過。串本を過ぎると紀州由良へと向かった。

・・・数隻が遅れていた。

「蒸気機関を持たない艦は足手纏いになるな」

風向きの影響が大きいのだ。

紀州由良に停泊して合流を待ち、数日して再び連合艦隊が揃った。

ここで勝海舟がこう提案したのである。

「よし、ここから加太沖まで競争だ！」

艦船による競争の提案である。

「ここから先は熊野沖のような危険性も少なえ。新年祝いに航海術を競おうじゃねえか」
各藩の乗組員は目を剥いたが、艦を操る海軍塾生達は乗り気だった。・・・彼等には自信が芽生え始めていたのだ。

「よし！ やろう！」

各藩も合意した。そして各艦が由良を飛び出していく。

「負けるな、藩の面目を潰すな！」

「行けー！」

それぞれの艦船が、全速力で北上し始める。

逆風であろうとも力強く突き進む蒸気船はさすがの力強さを見せていた。蒸気機関のない帆船は置いてきぼりである。

そして最も早く紀州・加太沖に着いたのは松江藩の第一八雲丸だった。

続々と到着して来る。

「・・・この経験が塾生達を育ててくれただろうよ」

結果を知った海舟は目を細めている。

全艦の到着を待ち、ここで艦隊を再び整えると、文久四年一月八日、將軍を乗せた翔鶴丸を先頭にして日本艦隊は大坂湾に入ったのである。

大艦隊が天保山沖に投錨した。

それに気付いた大坂の民衆が海岸沿いに殺到していた。警護を押し退けるようにして艦隊を臨めている。

「何や、何や！ 黒船の大艦隊が攻めてきたんか！」

十二隻もの大艦隊が突如、大坂湾に大挙して現れた事で、目を丸くしていた。

「違う違う、先頭の大船は幕府の翔鶴丸や」

不意に到着したのが日本の大艦隊だと知って、また驚いた。

「將軍様の大艦隊やねんて」

大坂湾に威風堂々と現れたのは日本の連合艦隊。その大艦隊を率いているのいは幕府であり、將軍様なのだ。

「これだけの大艦隊を率いて現れるとは。・・・まだまだ幕府健在やな」

幕府の底力を思い知らされた思いである。

「將軍様がまた上洛するのか？」

京を中心に揺れ動く現状に、関西の民衆は慣れてきている。

「將軍がこれだけの軍艦を率いて来たとは、・・・さあ、京のお方達は幕府をどうするつもりなんかな」

人々は幕府よりも朝廷が上に立った事をよく理解していた。

・・・確かにそこが問題なのである。

艦隊の指揮をとった勝海舟は、将軍の上洛に一抹の不安と希望を入り混じらせていたのだった

。

翔鶴丸を降り、上陸した将軍家茂は大坂城に向かった。

天保山からの陸路は新撰組が加わるなどして大々的な警護を固めており、将軍は無事、大坂城に入った。

それから数日後の正月十四日、将軍家茂は大坂城から京へと向けて出立。将軍を乗せた駕籠と行列が淀川沿いを上っていく。

新撰組は一足早く伏見に入り、市中警備についていた。将軍は伏見奉行所で一泊する事になっていたからである。

翌十五日、将軍が伏見から京に向かって進み始めると、その行列に新撰組も随従して警護に当たった。

・・・そもそも新撰組は、将軍警護を目的として江戸で集められた浪人集団である。近藤勇らは漸くその目的が果たせた思いの中で、感激の警護任務を行っていたのだった。

もう京は目前である。

「ここが最後の休憩になるな」

近藤と土方はやや安堵感を抱きつつ、将軍の行列が伏見稻荷で休息を取る様子を見守っていた。

すると、そこに馬が近付いてきた。人が乗っている。

・・・誰だ！

緊張が走る。

新撰組は血相を変えて飛び出した。

「馬に跨った男は誰だ！」

近藤の声に反応した隊士が馬の行く手を遮る。

「どけ！ 邪魔をするな！」

と一喝する馬上の男の目は鋭かった。

それが誰なのか、将軍は直ぐに分かったのだろう。

「・・・慶喜殿」

と口にして立ち上がる。

「無事京に着かれて何より」

一橋慶喜は不敵に笑いながらそう言った。

馬上から見下ろす姿に将軍・家茂は嫌な感じを覚えた。

・・・遊び心なのか？ それとも、もう徳川幕府も将軍も無用だと言うのか？ 不安を駆り立てるためなのか？

島津久光や中川宮らと組んだ形で、既に実権を握っている事を示すが如き振る舞いにも思える。

そんな将軍の表情を確認すると、慶喜は一足早く洛中に消えて行った。

若い将軍は不安を払拭できぬまま立ち尽くすしかない。

でも我を取り戻し、

「行こう」

と言って行列を京に向ける。

そして威風堂々と入京し、二条城に腰を据えた。

・・・これからここに留まって孝明天皇との親密度を深め、公武一和・公武合体を強固にしなければならぬ。

将軍家茂は命を惜しまぬ決意を固めていた。

— 大坂・天保山沖 —

坂本竜馬は塾生達を観光丸の甲板に集めた。

「坂本さん、この観光丸は佐賀藩に返さんと聞きましたが」と塾生達が尋ねてくる。将軍と共に江戸からやって来た諸藩の艦船は、海軍塾生を下船させてそれぞれの藩の管理下に戻って行ったが、観光丸だけは残されており、そこに塾生が集められたからである。

「おおよ、塾の練習艦として利用させてもらう事になっちゅうきに」

竜馬がズバリそう答えると、

「いいんですか！」

「心配はいらん。許されちゅう」

塾生達が騒ぎ出す。

「わしらがこの外輪型コルベット艦を毎日使って構わんが？」

「そうよ」

「おおー！ まっこと！」

皆、声を上げた。

佐賀藩へと返されるまで暫くの間、海軍塾専属の練習艦として利用する事を許されているのだ。大久保忠寛や勝海舟の尽力によるものだ。

「さあ、このまま神戸へ行くぜよ」

「おー！」

観光丸は天保山沖を離れていった。

— 神戸・小野浜沖 —

錨を下ろした。

建設中の海軍操練所と海軍塾が目と鼻の先にある。

・・・この日から塾生たちは観光丸を使って大坂湾を駆け回り、実習訓練を重ねていくのである。その甲斐あってか、塾生達は着実に力を付けて行き、後々には独立したカンパニーとしての海運業を切り開いていくのである。

それから数十日が経ち、勝海舟は坂本竜馬を呼び出した。

天保山から海を臨んでいると、竜馬を乗せているであろう観光丸が現れた。

海舟は観光丸を操っている塾生達の姿を見詰めながら、

(・・・確かに塾生達は腕をあげ、航海術も様になってきているように見える)
などと思っていた。

そんなところに坂本竜馬が現れ、近付いてきた。

「どうです先生、もう瀬戸内やら大坂湾なら塾生達は立派に操りゆうじゃろう」と竜馬が言う。

「おお坂本、俺もそう思っていたところさ。・・・塾の方は順調なようだな」

竜馬はニタリとして、

「あいつらは、わしが目を光らせちよりますきに、世界に立ち向かえる海軍兵士にきつとなるはずです」

と言い切り、海舟は鼻で笑った。

「・・・操練所建設の方はどうだ、順調か？」

「与之助殿が万事上手く進めちよりますきに、心配無用です」

間もなく神戸に完成する海軍操練所は、勝海舟の門弟として共に長崎で軍艦操練を学んだ佐藤与之助が神戸周辺台場御用となり、台場工事や操練所に関する一切を指揮していたのだった。

「そうか、順調か」

「それで海軍塾の教授方としても塾生達に海軍知識や操練術を教えてもらっちよります」

海軍塾の実技や知識も佐藤与之助に頼っていたのである。竜馬は海軍塾の塾頭として、塾生が間違いを起こさぬよう任されている立場であった。

「それで、ちくと困っちゅう事もあります」

「何だ？」

「与之助殿が塾生達に、フルベッキ先生は、フルベッキ先生は・・・っていつも言いよりますきに、困っちよります」

竜馬は佐藤与之助が異国人を尊敬しているような発言をする事に違和感を覚えていた。

「そう言うな、俺だってよ、あの先生には尊敬の念がある」

英語を始め、西洋の文化や政治の事を教えられていた海舟は与之助を庇う。航海術は西洋の文化や言語が関わるだけに仕方がないものでもある。

「けんど、攘夷思想から抜け出していない塾生がまだまだ多いろう、なのに異国人信仰を口にされたら塾生達の心が乱れる。そこが心配ながです」

「・・・そうだな」

頷きながら海舟は渋い顔をした。

そして海舟は、竜馬の顔をジッと見つめた。

「いよいよだ」

「えっ、・・・いよいよ？」

「観光丸を佐賀に返さねえとならねえんだよ。準備しておいてくれ」

「ええっ！」

あまりにも突然だった。

・・・残念で堪らない。

竜馬には漸く塾生が慣れたこの蒸気船を失うのが、海軍塾にとって大きな後退になるように思える。

「そんな顔をするな」

いつの間にか、竜馬は海舟を睨んでいた。

「何とかならんがですか！」

怒りを見せる竜馬に、海舟はこう返す。

「最後に塾生の實力を見せてもらうぞ、観光丸で馬関海峡に行くんだ」

「ば、馬関じゃと！」

長州が命を懸けて攘夷を実行し、異国船と戦い続けている海峡である。

「どうだ、行ってみる勇氣はあるか？」

「おおよ」

竜馬はゾクゾクッとした。

「そして・・・長崎にまで行くんだ」

海舟はそう言った。

・・・長崎！

竜馬は目を輝かせる。

「どうだ、行きたいか？ 長崎に」

「無論じゃ、先生！」

声を荒げた。

・・・長崎には西洋文化が溢れている。忘れかけていた夢がそこにある。

そう思えたのだ。

勝海舟にすれば竜馬を海外の空気に触れさせようという考えがある。

交易に憧れ持つ竜馬に、長崎の現状とそこに巢食う諸外国のカンパニー制度を見せておこうとも思っている。

(・・・幕府を利用した海軍構想が破れた場合、俺はどうなるか分からない。でもこの坂本なら塾生を束ねて、日本を守るための別組織として存続し続けてくれる。カンパニーという資本主義制度とあらゆる人脈を駆使してな。・・・海軍としての技術は身に付けさせてあるんだからよ)

そしてそこに暗躍する異国人エージェントの存在を知り、異国人の本質を感じて欲しい。
それが海舟の竜馬に寄せる期待なのである。

・・・全ては綺麗事ではない。

そんな一面がある、ましてや異国人は日本を利用すべくやって来ているのだ。

それを知らなければ、日本は異国主導の交易によって食い物にされてしまうだろう。

(坂本、陸奥、近藤といったところは、身分は低くとも、有能な商売人としての資質がある)

海舟はそう感じていた。彼等への期待はどんどん大きくなっている。

(異国人に負けぬだけの商才を開花させて欲しい)

そんな願いがあるのだ。

<次章> 陸奥宗光の秘密の章に続く

竜馬外伝 i 42 京の賢侯政体の章

<http://p.booklog.jp/book/95236>

著者：中祭邦乙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nakamatsuri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95236>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95236>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ